文部省選定

「新薄雪物語　清水寺花見の場」

「南総里見八犬伝」立けい

歌舞伎の立廻り

16ミリ・カラー34分　210,000円　企画／監修・国立劇場　製作・桜映画社

■解説

歌舞伎では、斗争の場面が「立廻り」又は「タテ」とよばれる一つの見せ場になっている。主役の華々しさをひき立てるのが目的で、斗争の激しさよりも、見た目の美しさ、楽しさをねらった情景が展開される。「立廻り」の場面はタテ師が独立して工夫・演出するが、とんぼに代表される軽わざ風の芸を織りこんだ独特の演技によって、華麗な舞台がつくり出される。歌舞伎本来のショウとしての楽しさを満喫させてくれる見せ場といえよう。

この映画は、タテ師、坂東八重之助（無形文化財技芸者）の活動を通して「立廻り」の基本訓練、構成演出の過程、及び代表的舞台を記録、その魅力の本質を解き明かした作品である。国立劇場の歌舞伎俳優研修生の指導場面では、「立廻り」の基本とともに、芸への道のきびしさと、訓練の合理性が捉えられ、又、「南総里見八犬伝」の演出過程では、一般にはなかなか見ることのできない歌舞伎のけいこ風景が見られ、興味深いものがある。

「南総里見八犬伝　芳流閣屋根上の場」

■出演

市村羽左衛門
中村　橋之助
市川　銀之助
尾上　松　鶴
尾上　松太郎
尾上　緑三郎
尾上　辰　夫
尾上　小　辰
尾上　緑　也
尾上　柏三郎
坂東　羽之助
坂東　新次郎
坂東　うさぎ
坂東　八重蔵
坂東　八重丸
岩井　若次郎
岩井　柾　人
市川男女二郎
市川　滝二朗
市川　笑　也
中村　芝喜松
中村　翫
国立劇場第六期歌舞伎俳優研修生
菊五郎劇団音楽部

■指導

菊五郎劇団立師
坂東八重之助

製　作　株式会社 桜映画社　東京都渋谷区代々木1-57-1 代々木センタービル　〒151 TEL 03(3320)6311 FAX 03(3320)7666

配　給

■内容

とんぼの訓練

軽わざ風演技の代表であるとんぼは、歌舞伎役者を志す者にとって、欠くことのできない心得とされてきた。国立劇場の研修生の授業でも、重要な課程となっている。はじめは両手を手拭で持ってもらってかえり、はずみや基本のフォームを覚えてゆく。単純な「三とく」から「後がえり」「かえりおち」「かえりこし」「ねこおち」など、かえる型も、三十種ほどあり、五年、十年かけて一人前になる。

棒の訓練

「立廻り」は、基本となる型を組み合わせて構成する。「天地」「やまがた」などと名称のついた型が三百種類ほどあるが、その基本の型を覚え、美しく身につけることが「立廻り」の基本訓練である。坂東八重之助の指導をみていると、美しい身のこなしが、いかに人間の身体の理にかなったものであるかが、よくわかる。又、八重之助の教え方のうまさも見事である。

八犬伝のけいこ

「立廻り」の舞台は、タテ師が独立して構成演出する。大げいこ場の練習風景は、「南総里見八犬伝・芳流閣屋根上の場」の立げいこである。台本では「立廻り宣しくあって…」とか「華々しきタテになり」などと数行で済まされている所を、十数分の舞台に仕立てあげるのがタテ師の仕事だ。

八犬伝舞台けいこ屋根上の「立廻り」は、足場が斜めになっている所に難かしさがあり、又、「かえりおち」といった高度の技もくみこまれ、けいこは慎重に進められる。熟練者が少なくなってきたため、二十日以上も続く舞台で、危険の伴う高等技術がなかなかみられなくなってきたが、そうした芸のいくつかが披露される。

■「歌舞伎の立廻り」について／すいせんの言葉

早稲田大学教授　郡　司　正　勝

この映画は、かぶきの特殊技術の「立廻り」を主題として製作されたものである。主として、いかにして、立廻りの日常訓練が行われるか、また、それが、どのように組立てられ、やがて舞台化されるかという過程を、当代随一といわれる、その指導者坂東八重之助を中心に焦点を据え、その生きた実体に迫ったもので、きわめてユニークな「立廻り」の映画作品となっている。

立廻りは、「たて」ともいわれ、「殺陣」という字が当てられる。その起りは、かぶきの発生当初に入った「蜘舞」の、太刀を用いた軽業の技術と、棒踊・槍踊などが混成され、奴方という役柄の成立の上で定着したものとおもわれる。元禄時代には、「太刀打」と呼ばれて、戯曲のなかで鑑賞され、享保・宝暦を経て「武道事」となり、寛政期に図式化されたものと考えられる。

これを振付ける「殺陣師」(立師) は、かぶき役者のなかから、その技に長じた者が、これに当ったものであるが、八重之助に至って独立専門家化したのである。

立廻りは、武術の型をも勘案してはあるが、芝居とはつかず離れずに成立していて、写実的な真迫性を嫌い、様式化され、音楽や杵を伴って、舞踊をみるがごとき楽しさを観客に与えるのが特色である。

なお、立廻りには、多くの型の種類があり、また持ちものも、太刀・長刀・短刀・鎌・棒などの武器のほか、花槍・桜枝・傘・手桶・縄・梯子など、あらゆるものを利用することができ、また、立役・二枚目・女形・道化方などによるそれぞれの特色と変化があるが、本作品は、まず、その訓練の過程に焦点を当てたところが特徴である。

■上演題目

和布苅神事　龍宮の場

新薄雪物語　清水寺花見の場

南総里見八犬伝　芳流閣屋根上の場

■スタッフ

製作	村山　英治	撮影	植松　永吉
	利光　久輝		村山　和雄
脚本 演出	藤原　智子	編集	吉田　栄子
		録音	東京テレビセンター
照明	水村　富男	解説	相川　浩